

都立小中高一貫教育校の設置に関する検討結果（概要）

I 小中高一貫教育の概要

1 現行の学校制度下における主な教育課題

- ・ 小学校、中学校、高等学校の各学校ではそれぞれが卒業時の児童・生徒像を目標として指導しており、小学校、中学校、高等学校間で連携した系統的・継続的な指導は不十分
 - ・ 年齢等により児童・生徒の発達には違いがあるにもかかわらず、同様に接したり指導したりすることがあるなど、発達の違いに応じた指導は不十分
 - ・ 学習指導要領には義務教育段階における指導内容や時期が定められており、学校として、学年や校種を越えて、児童・生徒の実態に応じた教育課程を編成する上では制約
 - ・ 中学校、高等学校への進学の際、新たな学習環境への順応や人間関係の構築などが求められ、興味や関心をもった学習や活動への集中を維持・継続することに影響
 - ・ 情報が進学先の学校に十分引き継がれないなど、児童・生徒理解等の情報共有が校種間で不十分
- ⇒ 「校種間の接続」や「学校制度の区切りと児童・生徒の発達状態の差異」に伴う課題の改善が必要

2 小中高一貫教育の意義

(1) 一貫教育による課題解決の取組

- ・ 区市町村は小中高一貫教育を実施し、いわゆる「中1ギャップ」の解消・軽減等の取組を推進
- ・ 東京都は小中高一貫教育校を設置し、学力向上に努めるとともに、リーダーとなり得る人材を育成

(2) 小中高一貫教育の意義

小中高一貫教育と中高一貫教育の双方の良さを活用

ア 小中高一貫教育の良さ

(ア) 12年間一貫した教育課程の編成・実施

児童・生徒の実態に応じた12年間にわたる系統的・継続的な指導により、学習内容の確実な定着と総合的な学力の向上を実現

(イ) 校種の枠を越え、児童・生徒の発達等に応じた指導体制や指導方法

- ・ 先取り学習により、早期から児童・生徒一人一人の資質や能力を伸長
- ・ 教科担任制等、中学校の指導体制や指導方法を小学校で段階的に導入し、進学に際して生徒が体験する様々な環境の変化を軽減
- ・ 入学時から、学習の過程や成果等の情報を蓄積し、指導の改善や評価へ継続的に活用

(ウ) 連続性のある学校生活

児童・生徒が興味・関心をもった学習や活動に切れ目なく打ち込むことが可能

イ 東京都が小中高一貫教育を行う意義

(ア) 一貫教育を生かした人材育成

都立高等学校・中高一貫教育校の特色に応じた資質や能力、目的意識等を生徒の入学前から向上させることが可能。一層効果的な人材育成が期待

(イ) 公立学校の新たな教育モデルを発信

小中高一貫教育の仕組みや取組を教育モデルとして発信することで都内区市町村における施策の推進を支援し、東京の教育全体を充実

(ウ) 義務教育に係る取組の実践

義務教育に係る課題に対し、より有効な取組の実践を期待。小・中学校に係る新たな課題が生じた際に、速やかな対応を実践し、区市町村等へ示すことが可能

3 小中高一貫教育の実施に向けた課題と対応

(1) 一貫教育に伴い発生する課題と対応

- ・ 人間関係の固定化 ⇒ 異学年の交流や他校との交流などの対応が必要
- ・ 学力差の拡大 ⇒ 少人数・習熟度別指導等のきめ細かな対応の検討が必要
- ・ いわゆる「中だるみ」⇒ 学習課題や試験等、学習意欲の向上を図る工夫が必要

(2) 設置形態の制約

- ・ 12年間の教育を行う一つの学校として設置することについては、現行の法令では「学校」としての定めがない ⇒ 都立中高一貫教育校を改編して活用、附属小学校を設置
- ・ 区市町村が法令上の義務に基づき設置している小学校は、その性質上、区市町村立や都立、私立中学校等への進学を希望する児童や、進学先について明確な希望を持たない児童が在籍。都立学校の附属学校とすることは不適當 ⇒ 都立小学校を設置

(3) 小学校への入学者決定の在り方

ア 入学者決定の考え方

- ・ 施設の制約等から希望者を全員入学させることは困難 ⇒ 選抜による入学者決定が適當
- ・ 選抜結果に応募者の資質や能力を最大限反映 ⇒ 抽選は実施せず、応募者本人の資質や能力を多様な観点から評価

イ 応募資格等

都内の小学校就学予定者。通学時間の上限の目安(1時間程度等)を示し、子供の体力等の状況を保護者に確認

(4) 12年間の途中段階における進学・募集の考え方の整理

ア 在校生の進学の際の選考及び他校からの募集の考え方

- ・ 在校生が進学の際に選考を行うことは、進路について改めて考える契機
 - ・ 他校からの生徒募集により、人間関係を広げる環境を作ることが可能
- ⇒ 進学の際の選考や、児童・生徒の募集を、小学校と中学校の間の1回実施

イ 小学校第1学年から入学した児童が中学校段階へ進学する際の選考

- ・ 小学校在学中の成績等を基に、中学校が進学者を決定することが適當
- ・ 可能な限り多くの児童が進学できるよう、習熟度別指導等の対応が必要

ウ 中学校第1学年からの生徒募集

- ・ 適性検査により入学者を決定することが適當
- ・ 在校生と新入生との学習進度等の違いを想定し、教育課程や学級編成に配慮が必要

(5) 教職員の配置等に係る留意点

- ・ 東京都の教員に求められる資質や能力に加えて、「12年間の一貫教育の理念を理解し、熱意と使命感をもって、新たな教育モデルを実践する力」等の資質や能力が必要
- ・ 校種の枠を越えた指導を可能とするため、複数校種の教員免許を有することを原則
- ・ 一体的な運営を実現するため、管理職の配置等の検討が必要
- ・ 開校までの教員養成や、開校後における研修について、引き続き検討が必要

II 東京都が目指す小中高一貫教育校

1 世界を舞台に活躍できる人材の育成

経済や文化など、グローバル化が急速に進展する中、諸外国との間ではし烈な競争と一層の連携。日本経済が伸び悩む中、世界において相対的に我が国の存在感は低下

⇒ 世界を舞台に活躍できる人材の育成が必要

(求められる資質や能力)

- ・ 日本人としての自覚と誇り
- ・ 自らの活躍の場所を広く世界に求めようとする意欲
- ・ コミュニケーションをとり協働するための英語力 等

(東京都の取組)

独自の道徳教育教材による道徳性の涵養や、英語力育成等の取組を実施。今後とも世界で活躍できる人材の育成を図る取組の加速が必要

2 小中高一貫教育の良さを生かして育成すべき資質や能力

小中高一貫教育の良さを生かした、早期からの一貫した系統的・継続的な指導などにより、特に、英語力の育成や日本人としての自覚と誇りを持って世界で活躍しようとする意欲の醸成を効果的に行うことが可能

⇒ 世界を舞台に活躍できる人材を育成するため、小中高一貫教育校の設置を前向きに検討すべき

3 都立小中高一貫教育校における教育理念

(1) 教育理念

次代を担う児童・生徒一人一人の資質や能力を最大限に伸ばさせ、世界で活躍し貢献できる人間を育成

- 高い語学力
- 豊かな国際感覚
- 日本人としての自覚と誇り

(2) 生徒の将来の姿

高い語学力を活用して世界の様々な人々と協働するとともに、論理的な思考力を用いて、諸課題を解決し、様々な分野で活躍する人材

(3) 教育方針

ア 高い語学力と豊かな国際感覚を育てる

- ・ 日常的に英語に囲まれるとともに、児童・生徒自ら英語を活用できる環境を創出
- ・ 英語を母語とする外国人等と交流できるなど、校内の学びの場を国際化
- ・ 小学校の早期から高等学校まで一貫した系統的・継続的な指導を実施
- ・ 身に付けた英語を活用する場を設定し、英語の力を更に向上

イ 思考力、判断力、表現力を鍛え、世界で活躍する力を育てる

- ・ 課題発見・課題解決型の授業を重視し、自ら考え、判断し、表現する力を育成
- ・ 日本語や英語、情報通信技術を活用して、論理的に説明する力を育成

ウ 日本人としての自覚と誇りを持ち、主体的に社会の形成に参画する態度を養う

- ・ 我が国の歴史や伝統・文化を理解し、尊重する態度を育成するとともに、他国の歴史や文化を理解し敬意を払う態度を育成
- ・ 主体的に社会に関わろうとする意欲や実践する力を育成
- ・ 国際社会の一員として人々と協力し、社会の形成に参画する態度を育成

エ 児童・生徒の資質や能力を最大限に伸ばす

- ・ 均質的な教育から脱却し、児童・生徒一人一人の資質や能力に応じた指導を実施
- ・ 学習状況など、児童・生徒の情報を校種の枠を越えて共有・活用し、指導

4 都立小中高一貫教育校の教育課程

(1) 教育課程の基本方針

現行の学校制度下において、小学校・中学校・高等学校の12年間を一体として捉え、児童・生徒の発達等に応じて適切な学習内容の配置及び指導を実践する、柔軟な教育課程を編成

(2) 教育課程の編成

児童・生徒の実態等に応じて、より柔軟に教育課程を編成することが必要

(3) 教育課程編成の基本的な考え方

ア 英語教育を重視する

- ・ 各学校段階で身に付けるべき能力を明確にし、一貫性を持った目標を設定
- ・ 十分な学習時間を確保し、小学校の早期から外国人指導者を活用した英語教育を推進
- ・ 海外留学や海外姉妹校訪問など、英語の活用が求められる活動を計画的に推進
- ・ ディベート大会や学習発表会などの校内行事において、英語を用いる場面を意図的に設定

イ 自ら考え、判断し、表現する活動を十分に取り入れる

- ・ 「アクティブ・ラーニング」を児童・生徒の発達に応じて導入
- ・ 日本語や英語で、論文にまとめ発信する学習や、議論し互いに高め合う活動を充実

ウ 我が国や世界の歴史を学び、伝統・文化に触れる活動や、地域に関わる活動を十分に取り入れる

- ・ 我が国の伝統・文化や、諸外国との文化交流等についての学習を重視
- ・ 地域の課題を解決する活動や地球規模の取組が必要な活動への参加

エ 発達段階や学習状況に応じた学習方法や体験活動を取り入れる

- ・ 基礎・基本の定着を図る繰り返し学習や学習内容の先取りを実施
- ・ 早期からの海外体験や海外留学の機会を設定

(4) 教育課程の特色

ア 授業時数を確保した上で実施する学習内容の先取り

- ・ 国語、社会、算数・数学、理科、英語の5教科で学習内容を先取り
- ・ 実施に当たっては、土曜日の活用や週時程の増加等による授業時数を確保

イ 教育課程編成上の余裕の時間の活用

学習内容の先取りにより生み出した時間を、海外留学、大学での聴講等、自らの進路選択に関わる学習に活用

ウ 企業や公的機関、大学等との連携

企業等と連携し、世界を舞台に活躍している人材の講演や就業体験などの活動を実施

エ 教科の構成等

教科の構成や授業時数の配当を工夫し、教科「英語」の早期実施や言語能力の向上を目的とした活動などを実施

オ 小学校における教科担任制の段階的な導入

原則、学級担任制。教科担任制や定期考査等、中学校の指導を段階的に導入